

# 美博だより

VOL.

72

飯田市美術博物館ニュース—— 2006. 1. 5

発行●飯田市美術博物館 〒395-0034 長野県飯田市追手町2-655 ☎0265-22-8118 印刷●龍共印刷株式会社



仲村進 「遠山郷」 昭和60年 本館蔵

## 足もとを見る

館長 井上 正

何ごとについても、当り前のよう<sup>ことごと</sup>に思っ<sup>て</sup>てしまっている事柄の根本をあらためて疑ってみることは大変有益である。近年、年を加えることにその思いを深くする。

美術史学は作品の創り出した美の様式を探り、人間の美意識の変遷について考<sup>え</sup>る学問である。一本調子<sup>に</sup>この道を進めば、「二時代一様式」論に行き着く。小異はあつても大同のこととして一様式を指摘することで論は明快となる。

しかし、仏教美術のすべてを美術史の一部として型に閉じ込め、「一時代一様式」の原則に従<sup>は</sup>せ<sup>た</sup>ことは大きな誤りであった。仏教美術には型に嵌めることとは対極的な「感得<sup>かんとく</sup>」による自由な仏の姿があつたことを忘れていたのである。

この誤つた方法によつてつくられた古代日本美術史は、大きく歪<sup>ゆが</sup>んでしまった。大小を交えて、訂正すべき問題は実に多い。

自分自身の立脚点をあらためて見直す心構えで、それぞれの専門の分野を振り返る旅に出ることをおすす<sup>め</sup>したい。

寄贈記念特別展

# 仲村進展 — 大地と語り、牛に歌う —

1月14日(土)～2月10日(日)

仲村進は、昭和四年(一九二九)、下伊那郡松尾村(現飯田市松尾)に生まれた日本画家です。満十四歳の時、満蒙開拓義勇軍に志願して北滿に渡り、外地で敗戦を経験して辛苦を乗り越え帰国しました。

帰郷後、郷里の南画家片桐白登に絵画を習い、県展・新制作協会展に出品、その後、高山辰雄門下に入り、日展に活動の場を移しました。

日展では、二回の特選、文部大臣賞を受賞し、審査員も務めて評議員となりました。また、山種美術館大



▶黄砂の大地 昭和五十八年 個人蔵

賞を受賞し、現代日本画の期待作家として注目を浴びました。

平成十六年(二〇〇四)二月、制作への情熱が冷める間もないまま、仲村進はこの世を去りました。同年十二月、ご遺族より作品三十五点の寄贈をいただき、本展が実現することになりました。これに当館での購入作品、山種美術館賞展大賞受賞作品などを加え、仲村進の生涯を追います。

今回の展覧会は、三つの部屋で構成します。最初の部屋の展示は故里山河です。ここでは、平成六年に開催された個展「故里山河」の出品作を中心に展示いたします。

この個展は、郷土の風土を見つて描いたもので、伊那谷の景観を下地にした六曲一双の屏風作品を中心に、重厚な風景画で彩られました。

これらの風景画は実際の景観を丹念に描いたものではなく、自らが住む風土に潜むものを描いた現代の山水画と呼べる作品でした。仲村進が抱く郷里の風景への思いは、単なる

自然礼賛ではありません、それは土地に根づいた魂までも見つめた目でした。

第二室は、初期の新制作協会展からはじまり、日展出品作、山種美術館賞展大賞作品、グループ展での研究などを展示し、仲村進の生涯を追えるように構成しています。

身近な景観、人間の営みへの視線から始まり、開拓地での牛馬との交感、農民と大地、そして現代が忘れつつある大地への心などへと、仲村進の芸術の目は展開していきましました。ここでは、その重厚に深まってきた芸術観をじっくりとご覧いただけます。農業に従事しながら、芸術にも妥協することのなかった仲村進であったからこそ描けた大地と農民、牛馬の姿が様々なことを語りかけてきます。

最後の部屋は、晩年に展開された牛・哀歌の部屋です。ここでは、平成十一年の個展「大地・牛哀歌」の出品作を中心に展示いたします。

この個展では、仲村進の作品に住み続けた牛が、大きく形

態を崩し、空間の中でねじ曲げられていきます。また赤と黒で大胆に構成された画面は、重く沈むようでもあり、情熱が奥底から湧いてくるようでもあります。それは、長年テーマとしてきた大地や自然、農民の世界から離れた、生命の根源へと向かう態度があるように思えます。

晩年に至って、それまで仲村進の作品を見続けた来たる者を驚かせた、力感あふれる作品が会場に充満します。そして牛たちは、さらに密度を高めて空間に解き放たれ、永遠の場へと旅立っていきます。

仲村進は、伊那谷に生き続けた作家です。その芸術観は伊那谷の風土なくしては生まれませんでした。この地の芸術がそこにはあります。



▶牛・哀歌 平成十年 本館蔵

調査ノート

飯田市・開善寺の  
摩利支天(まろしてん)坐像



摩利支天とは、サンスクリット語マリーチーの音訳で、日月を指し、陽炎を神格化したとされる古代インドの神です。自らの姿を消して災難を除き利益を与えたいわれ、日本では武士の守護神として、江戸時代には大黒天、弁才天とともに蓄財福德の神として商工業者の間で信仰されてきました。飯田市上川路の開善寺は、渡来僧の清拙正澄(一二七四—一三三九)を開山とする臨済宗の名刹です。この渡来僧は摩利支天の像を袈裟にくるんで中国から海を渡ってきたと伝えられ、清拙にゆかりのある寺には必ず鎮守として摩利支天の像が祀られています。そして開善寺でもこれまでほとんど存在が忘れられていた摩利支天の像が現存することがこのたび改めて確認されました。

本像は、三面六臂の木造で七頭のイノシシの台座上に坐し、像の表面に彩色と金泥を施しています。

す。三面のうち右面はイノシシの顔になっています。像高約十三センチで台座と光背を含んでも二十六センチ程の小像です。經典にはこの像を造る際にはできるだけ小さくするよう決められており、現存する摩利支天像は一尺に満たない小像である場合が多いようです。

ほとんど人目に触れることなく厨子に入っていたためか保存状態は良好で、丁寧な彫技で好ましい像です。清拙の摩利支天信仰などを考慮すれば開善寺が建仁寺の末寺であった十四—十六世紀頃に制作されたものと思われます。

同じ飯田市内の白山社里宮にも摩利支天のお像があり、類例の少ないこうした仏像が近隣に二体も現存するのは貴重なことです。

(織田)



▶ 摩利支天坐像 飯田市・開善寺蔵

資料紹介

辻前遺跡出土の  
把手付鉢

常日頃公開されていない上郷考古博物館所蔵遺物を中心に、関係各所から集めた資料を展示する夏休み特別陳列は今年度で四回目になりました。昨年夏には「考古学からみた飯田下伊那の渡来系文化」を企画展示し、馬匹文化等々を見て頂きました。

この集めた遺物の中に、朝鮮半島の技法を真似た土師器の「把手付鉢」が三点ありました。これは飯田市川路三区の辻前遺跡の遺構外から平成十一年に出土したもので、長野県下で初めての発見です。この土器は三点とも古墳時代後期初頭に比定され、平底の浅めの深鉢でほぼ同一形態です。器高一〇〜一二センチ、口径一三〜一四センチ、底径六センチを測り、厚さ二センチ、長さ三〜四センチの先端部丸味のある把手が一つ付きます。内一点は内面黒色研磨の内黒土師器です。

この種の把手付土師器は古墳時代の甗に多くの類例があります。しかし、今回紹介した把手付鉢は把手が一個だけと言うところに意味があります。今でこそ把手付カップは一般的ですが、古墳時代中期以前には日

本にはなかつたのです。大陸や朝鮮半島から渡来人が日本にもたらした新しい文物資料の一つで、渡来人のあるいは渡来系文化の痕跡遺物として、九州を中心に発見されています。比較的古いものは丸味を帯びて棒状に突きだし、新しいものは角形把手となります。

最近、当地方の古墳時代資料に、渡来系の遺構遺物が比較的多く発見され議論百出しています。死生観に伴う風習や技術を伴う内容の事項は、渡来人本人や間接的な存在を示唆しますが、朝鮮半島系の品物が単品で発見されても、必ずしも渡来人の存在を意味しないことに注意しながら資料収集をしています。(岡田)



